

研究・教育ツールとしての日本デジタル文学地図

大阪大学（名） プロジェクトメンバー：飯倉 洋一
ハイデルベルク大学（ドイツ） アロカイ・ユディット

大阪大学 中尾 薫
東京大学 中村 寛
大阪大学（院） 黄 夢鶴
大阪大学（院） 樋口 純子



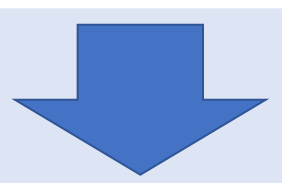
<https://literarymaps.nijl.ac.jp/>

DLM (Digital Literary Map of Japan) とは

WEBサイト「日本のデジタル文学地図」(DLM)は、日本の古典文学に出てくる歌枕・名所をマッピングし、その概説、歴史的・地理的な説明、用例を示し、その用例の載るテキストの原本画像を載せるとともに歌枕・名所のイメージ画像にもリンクしている。

日本古典文学の研究や教育、さらには観光などにも役立つサイトを目指している。現在サイトを公開して利用していただく一方で、開発を続けている。

内容構成



歌枕分布図

- ・歌枕の分布・距離感の可視化
- ・紀行文・道行における旅（歌枕探訪）の行程の可視化



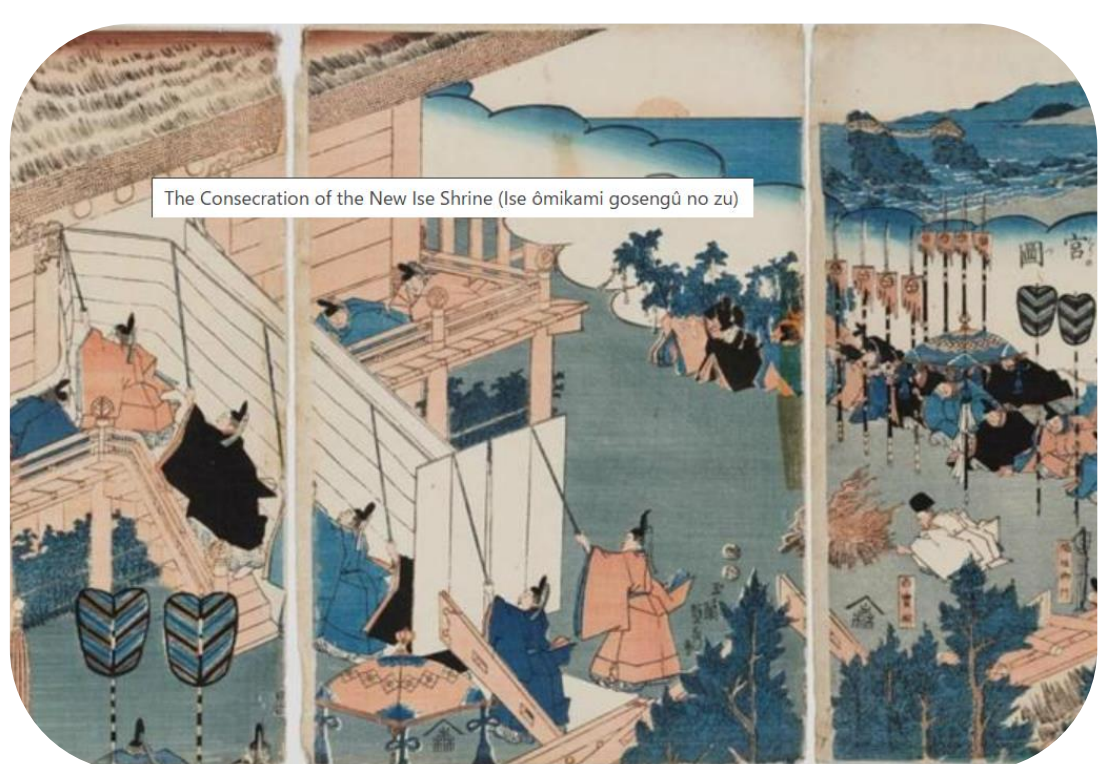
概要の説明

歌枕事典としての機能



用例

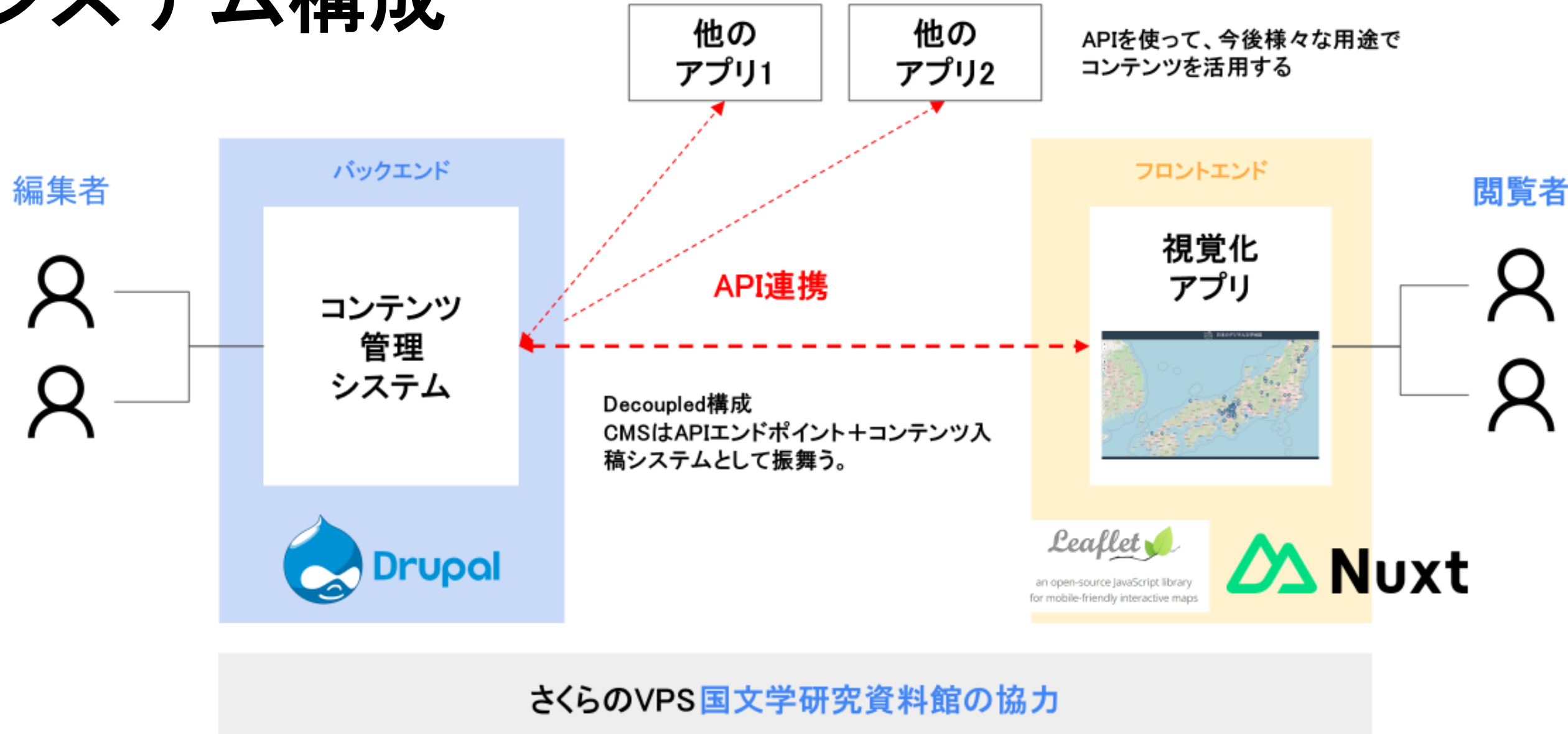
「歌枕」イメージの変遷を知る



絵図

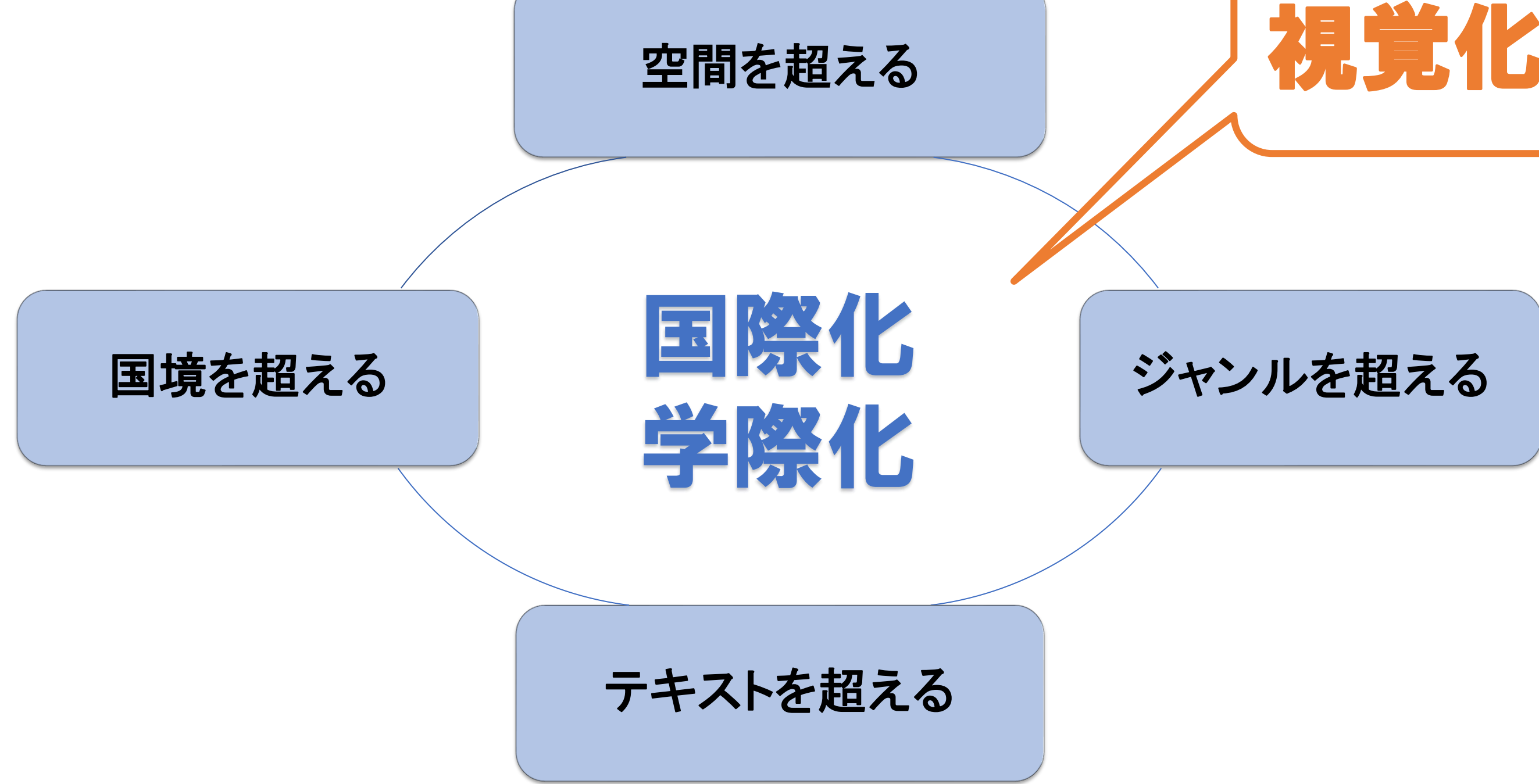
歌枕のイメージ画像（名所絵）のパターンを知る

システム構成



【付記】
本プロジェクトはハイデルベルク大学（文理融合プロジェクト支援機関）・国文学研究資料館の国際共同研究「GISを用いた総合地域情報に関する国際発信方法に関する国際的発展研究」・科研基盤(B)「デジタル文学地図の構築と古典文学研究・古典研究への展開」（2021～2025年度）などの支援を受けたものである。

意義



活用方法

- ① 研究への利用
▷文学・演劇・美術の中の名所イメージの確認(間テキスト性・間メディア性)
- ② 教育への利用
▷日本国内外のく日本文学・文化)教育への活用
▷研究者や学生などへの資料・情報提供
- ③ 遊覧・観光への利用
▷修学旅行や史跡巡りなど

研究への利用例

「デジタル文学地図」の「逢坂」

歌枕としての特徴 ①： 畿内と東国との境界となる関所

連想（歌枕として何を呼び起こしているか） 夕附鳥（木綿附鳥）、関の杉村、さねがづら、胸むかへ、旅人、関の明神、琴の音、走り井、蟬丸、別、近江、往来、関の清水、逢ふ

「和歌」…これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも逢坂の関（後撰 雑一、蟬丸）
逢坂の嵐のかぜはさむけれど行系しらねば 侘つづぬる（古今18雑下 詠み人しらず）

→「逢坂」は、**まだ見ぬ未知の世界、すなわち都を起点とした異界への入口。**

『雨月物語』巻之一「白峯」の冒頭に見る「逢坂」

あふ坂の関守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過しがたく、浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、**不尽**の高嶺の煙、浮島がはら、清見が関、大磯小いその浦々、むらさき艶ふ**武蔵野**の原、塩竈の和ぎたる朝げしき、象湯の蜃が苦や、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとどまらぬかたぞなきに、猶西の国の歌枕見まほして、仁安三年の秋は、蔭がちる難波を経て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行々**讃岐**の真尾坂の林といふにしばらく筈を植む。草枕はるけき旅路の労にもあて、観念修行の便せし庵なりけり。

西行の旅程

→物語は冒頭から「逢坂」を越えて「知らない世界」を巡る。主体は西行なので「歌枕」探訪であるが、これらの歌枕は京人にとっては、**異界をめぐる旅**。

- 【国際ワークショップの開催】
- 「デジタル文学地図の試み」／「古典のジャンルと名所—デジタル文学地図の活用—」／「名所の図像学」
「デジタル文学地図の構築と古典文学研究・教育への展開」／「(紀行)研究の新展開」
「名所」の形成とデジタル文学地図／「教育ツールとしての日本デジタル文学地図」など
- 【国際学会パネル発表】
- 飯倉 洋一・盛田 帝子・中尾 薫・アロカイ ユディット・黄 夢鶴「The Evocative Power of Famous Places in Japan」(EAJS2023)
- 【研究論文の発表】
- ・飯倉 洋一「デジタル文学地図の研究への活用—『雨月物語』を例に—」
 - ・Leo Born「Digital Literary Map of Japan 日本のデジタル文学地図: A Technical Perspective」
 - ・金 智慧「名所の形成と名所イメージの構築—『平家物語』の築島伝説を手掛かりに—」
 - ・黄 夢鶴「『和漢名所詩歌合』に関する一考察—形式と名所題をめぐる—」
 - ・中尾 薫「能<高砂>における名所・旧跡—世阿弥の作劇法に照らして—」 など
- (『BUNRON』9号、ハイデルベルク大学、2022年)

今後の展望

- ・連歌・俳諧・漢詩・説話・物語など用例データの拡充
- ・教育ツールとしての機能の向上
- ・教育現場での利用の促進や実践方法などの共有
- ・日本文学以外の分野との連携



じ
電
見
を
開
か
せ
く
だ
さい